# ネット社会という船に乗って　59

## 始めるのに遅すぎることなんかない

文 佐渡島庸平
text by Yohei Sadoshima

不思議に思っていることがある。大学生時代に選択したジャンルが、自分の得意分野だと認識している人が多いように感じる。人はなぜ、そう思うのか。学生時代の4年間。必死に勉強したといえる人はほとんどいないだろう。その4年間に学んだことなど、大人になってから1、2年学べば追い越せてしまう。

僕は編集者として20年間、キャリアを積んできた。確かに、これを活かした方がいいという感覚にはなる。しかし、僕が70歳まで働くとしたら、残りの時間は25年近くある。まだ何かを学び直して、編集者として残した以上の結果を出せる可能性もある。歳を取れば取るほど、学び方はうまくなっている。だから、スポーツでも、音楽でも、料理でも、学問でも、今から始めても、十分に成長できる。でも、多くの人は躊躇する。なぜだろう?

一つに、学生時代に選択したことは、自分の趣味嗜好を直感的に選べていて、それ以外のジャンルは結局、向いていないという可能性もある。また、学生はそれまで生きてきた年数の分母が少ない。だから、4年間だとしても、22分の4で、人生の5分の1を占める。今、44歳の僕が新しく学ぶ4年は、10分の1にしかならない。だから、同じ4年でも、歳をとってからだとインパクトを小さく見積もってしまうのではないか。

なぜ、今、僕がそんなことを考えているかというと、AIのサポートを受けるといろんな新しいことへの挑戦が楽になるからだ。さらにAIのアシストにより、学び方もよりうまくなるだろう。僕はAIを使いながら、マンガを描いてみてる。当初、マンガを描くということは、編集することよりもうまくなれないだろうと決めつけている僕自身がいた。しかし冷静に考えてみると、5年経ったら、編集者として少しはものになった。同じように5年マンガを描き続けたら、何らかのものになるかもしれない。なぜそんな風に僕は、すぐに考えれないのか。若い時に学んだことに大きな意味を感じてしまうのか。単に思考の誤謬（ごびゅう）でしかないように思う。

何歳からでも学び始めれる。始めるのに遅すぎることなんかない。そうしっかり思えると、新しいことに臨む時に本気になりやすい。40歳になってから始めたヨガで、若い時よりも身体の使い方に詳しくなった。同じように、AIを使うと、マンガをしっかりと描けるかもしれない。当分、本気で挑戦してみようと思う。

*Profile*
株式会社コルク 代表取締役
2002年講談社入社。週刊モーニング編集部にて、『ドラゴン桜』（三田紀房）、『働きマン』（安野モヨコ）、『宇宙兄弟』（小山宙哉）などの編集を担当する。2012年講談社退社後、クリエイターのエージェント会社、コルクを創業。著名作家陣とエージェント契約を結び、作品編集、著作権管理、ファンコミュニティ形成・運営などを行う。従来の出版流通の形の先にあるインターネット時代のエンターテイメントのモデル構築を目指している。